

## 博士論文審査要旨

論文題目：「鉄道国家アメリカ」の誕生——「大陸横断鉄道」と19世紀アメリカ社会の形成

著者：宗像俊輔 (MUNAKATA, Shunsuke)

論文審査委員：貴堂嘉之、中野聡、秋山晋吾

### 1. 本論文の概要

本論文は、これまでのアメリカ合衆国の大陸横断鉄道史において通説の「大陸横断鉄道＝太平洋鉄道」という等式を解体し、アメリカ資本で1855年に開通したパナマ地峡鉄道と1869年開通の太平洋鉄道の双方を「大陸横断鉄道 The Transcontinentals (複数形の大陸横断鉄道)」と定義し、その計画—建設—運行の一連の過程を丹念にたどり解明した、社会史的視座からの鉄道史研究の労作である。

アメリカにとっての大陸横断鉄道とは、単に内陸開発の延長線で、大西洋と太平洋の間の旅客・貨物輸送において交通革命をもたらしただけでなく、その計画立案は中国との交易拡大や中南米への領土的野心など、アメリカの海外膨張や「帝国」化と密接に関わっており、先住民や移民労働者、黒人らを従属させる白人中心の人種的支配構造を作り出すものでもあったことが明らかにされる。本論文では、大陸横断鉄道が完成したことで現出した「鉄道国家アメリカ」こそが、19世紀アメリカ社会を規定したとされており、その立論の仕方は近年の研究史にならえば、「鉄道植民地主義」—太平洋鉄道を介して、植民地主義、帝国主義、人種主義、資本主義が渾然一体となって展開された—の射程と共鳴している。

全体は、序章と終章をのぞくと、本論部分は5章構成となっている。第1章では、英国で誕生した鉄道がアメリカに導入され「鉄道の時代」が始まる時期が扱われている。1820年代のアメリカン・システムの台頭と1830年代のバルティモア&オハイオ鉄道の開業が連邦政府を突き動かしていく過程が描かれる。第2章から第4章までは、ゴールドラッシュ以前・以後に、大陸横断鉄道計画が連邦議会などでいかに論じられ、紆余曲折を経て建設・完成に至ったのかが分析される。第2章では、モンロー・ドクトリンの発表もあって、中国との交易拡大を主眼としつつ中南米が重視され、パナマでの交通インフラ整備が進む過程が描かれる。第3章では、ゴールドラッシュでパナマ地峡鉄道計画が前進し、この計画に西回り航路や「北西通路」の実現という世界的な意義が付与されていった様子が描かれる。第4章では、南北戦争前夜のアメリカで、太平洋鉄道のルートをめぐる対立が深刻化するものの、南北戦争時の南部選出議員不在の連邦議会で「太平洋鉄道法」(1862年)が成立し、1869年の完成へと至る過程が扱われる。このように、従来は大陸横断の鉄道建設については国民的コンセンサスがあったことを前提に単線的に描かれることが多いものの、実際には、建設途上では様々な対立が生じ、建設の企図は、その時々に関心に応じて継ぎ接ぎされた、パッチワーク状のものであったことが明かされる。本論最後の第5章では、鉄道建設と鉄道運行の現場をペイロールの史料を用いて、セントラル・パシフィック鉄道の労働者の労働実態を分析した。

### 2. 本論文の成果と問題点

本論文の第一の成果は、19世紀アメリカの発展を牽引した大陸横断鉄道の歴史を、太平洋鉄道のみならずパナマ地峡鉄道をあわせてその計画—建設—運行の過程を詳細に調べることで、国内の内陸開発の駆動源としての鉄道の位置づけを越えて、「西半球の帝国」となるアメリカ合衆国の陸路・海路の交通政策からその帝国主義的企図を明らかにした点である。交通革命により空間と時間が圧縮される時代に、アメリカの連邦議会において大西洋と太平洋をつなぐ交通網の確立が、国内政治や対外政策といかに関わっていたのかを検証した。

第二に、本論文がセントラル・パシフィック鉄道の従業員名簿や給与明細表など、いわゆるペイロールの史料を用いて、鉄道敷設に従事した労働者の労働実態を明らかにしたことで、鉄道史を敷設労働者の顔の見える社会史として描くことに成功している点である。大陸横断鉄道については、しばしば「東半分はアイルランド系移民が、西半分は中国人移民が」作ったなどと象徴的な語られ方がされてきたが、本論文では、史料上の制約から限られた期間のものではあるが、鉄道労働者の各工区での働き方、人種や移民集団別の給与格差、医療記録からは長時間労働が身体への負荷が大きかったことなどが、描かれている。

第三に、先述の「鉄道植民地主義」の萌芽を、1850年代のパナマ地峡鉄道建設にさかのぼって、歴史的に位置づけ直している点である。敷設計画から鉄道建設の過程で、いかに現地住民が暴力的手段で排除され、中国人苦力らが搾取されたのか、現地住民による「すいか暴動」がアメリカの軍事介入の口実を与えたことなどが描かれている。

以上の他にも本論文の成果は少なくないが、もとより残された課題がないわけではない。第一に、連邦議会議事録を中心に、鉄道建設をめぐる政治家間の地域間対立などを描くことには成功しているが、より地域に根差した鉄道建設擁護派・反対派の運動にも目配せすべきではなかったか。第二に、先行研究との関連では、従来の経済史・経営史、社史的な鉄道史のどこを乗り越えたのがより明確に提示されるべきだったのではないか。また、植民地近代の帝国史において最重要のインフラ、鉄道の歴史を考察する際には、鉄道債の発行など、資金調達のプロセスの検証がなされると、より立体的な鉄道史となるのではないか。第三に、空間的な鉄道網の拡充の歴史を検証する上では、メキシコやカナダなど他の隣接領域との関係や技術移転なども視野に入れることもできるだろうし、ペイロールの分析においてはより統計的な分析も可能ではないかとの指摘もあった。

これらの課題は、最終試験（口頭試問）のなかで著者自身が認めているところであり、本論文の学位論文としての水準を損なうものではなく、将来の研究において克服されていくことが十分に期待できるものである。

## 最終試験の結果の要旨

2022年6月8日

2022年3月31日、学位請求論文提出者・宗像俊輔氏の論文についての最終試験を行った。

本試験において、審査委員が提出論文「『鉄道国家アメリカ』の誕生——『大陸横断鉄道』と19世紀アメリカ社会の形成」に関する疑問点について説明を求めたのに対し、宗像氏はいずれも十分な説明を与えた。よって、審査委員一同は、宗像俊輔氏が一橋大学学位規則第5条第1項の規定により一橋大学博士（社会学）の学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有するものと認定した。